



2016年(平成28年)

6月号(No. 853)

公益社団法人

日本山岳会

The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>e-mail ● jac-room@jac.or.jp

マナスル初登頂から60年、日下田實会員も参加してカトマンズで記念式典を開催

英国などでは60年の記念を「ダイヤモンド・ジュビリー」としてお祝いする習慣がある。今年はマナスルとローツェの初登頂60周年。春のカトマンズに、登頂者の日下田實氏をはじめJAC会員、ネパール政府関係者らが多数集い、盛大な催しとなった。

黒川 恵^{さとし}

1956年5月9日、マナスル(8163m)が日本山岳会隊によって初登頂されたことは、いまさら言うまでもない。この偉業から60周年を迎えるにあたり、本会はマナスル・ワーキンググループ(WG委員長・尾上昇)を立ち上げて、ネパールにおける記念行事の開催を計画し、実行してきたのでその概要を報告する。なお、日本国内での本会主催行事としては、

7月10日に、マナスル初登頂60周年および山の日施行記念の催しが、市ヶ谷のJICAホールで予定されている(3ページ参照)。

まずは4月29日夜に本会主催で開催された、カトマンズ市内ラディソンホテルでの「マナスル初登頂60周年記念祝賀会前夜祭」における小林政志会長の開会挨拶の言葉を少しだけ引用させていただく。「……先の大戦の終戦からわずか

目次

マナスル初登頂から60年、日下田實会員も参加してカトマンズで記念式典を開催	1
マナスル西面・ビムタンへの山旅11日間	4
氷河調査フライトと現地調査行のご案内	5
栄光の陰でマナスル苦渋の2次隊	6
野口健さんのマナスルとネパールへの貢献	8
第1回「山の日」記念全国大会	
上高地と松本市内で開催	10
「山の日に向けて」山を考える⑩	11
Climbing & Medicine	72
図書受入報告	12
東西南北	13
図書紹介	14
新入会員	14
会務報告	16
会員異動	17
ルーム日誌	18
INFORMATION	18
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務局(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

11年、アジアの小さな島国の、それも敗戦国日本が、それまでの列強国によるヒマラヤ初登頂競争のなかで8000m峰に初登頂したことは、まさに快挙である。『もはや戦後ではない』と1956年に日本政府が言い、その後日本は高度経済成長に突っ走る。このマナスル初登頂は、この後の日本の経済成長を精神的に支えたとも考えられる。この事象は、登山ブームを引き起こすというようなレベルではなく、日本という国と国民に対して大きく、広範な影響を与えた登山だった。……このフレーズは通訳を通して、およそ1000人のネパール側来場者にも伝わり、多くの人たちが深くうなずいていたのが印象的であった。



前夜祭でスピーチする日下田会員

記念トレッキング、日本からの訪問団の概要については下記のとおりであった。

記念催事

◆ 4月29日夜の前夜祭／19:00～21:00／会場…ラディソンホテル



前夜祭で鏡割りをする小林会長、小川大使、マハト大臣、アンツェリン会長、ライ次官(右から)

(85歳)が2人の小学生のお孫さんとご家族を伴い、多くの訪問団員も乗車して、たくさんの方に見守られながらパレードした。

◆4月30日の公式記念式典／10…30／12…30／会場・ヤク&イエティホテル

ビドヤ・デビ・バンダリ大統領(女性)を迎えて、マナスルとローツェの初登頂60周年祝賀会が、約1000人の来場者でにぎわう会場で開催された。

記念トレッキングなど

◆4月28日発、マナスル山群チャーター・マウンテンフライトとカカニの丘5日間コース／参加者13人
◆4月20日発、迫力のマナスル西面展望トレッキング12日間／参加者7人。

◆4月29日発、ゴラバニ峠トレッキング10日間／参加者16人。

ほかにマナスル展望自然探検隊のグループ(12人)など多くのトレッカーがネパール・ヒマラヤの展望とトレッキングを満喫した。

強力だった現地協力態勢

このマナスル60周年記念企画の準備と実施にあたっては、ネパール登山協会(NMA)の会長アンツ

エリン・シエルパ氏をはじめとする幹部役員と、カトマンズ在住の大津昭宣会員の尽力が大きかった。

日本側事務局の実務者(前副会長・黒川恵)との連絡は電子メールで行なっていたが、昨日決定されたことが翌朝には変更ということも多く、29日夜のラディソンホテルでの前夜祭のテーブル配置と席順は、入場時間ぎりぎりまで調整した。

政府側要人の出欠に変更が生じるからである。

30日朝のパレードは、その行列がどこに向かつて、どこで終わるのか分からないまま長々と続き、ついに旧王宮では事前通告なく小林会長が呼び出され、高座に着席させられたのであった。昼の公式



公式記念式典に臨席されたビドヤ・デビ・バンダリ大統領(中央)らネパール政府要人と日下田会員(右端)

式典は、女性大統領ビドヤ・デビ・バンダリ氏が臨席するために、ヤク&イエティホテルは軍も出動する厳戒態勢であった。

ローツェと合同の公式式典

大統領を高座中央に迎えた式典では、日下田實会員が第3次マナ

スル登山当時のことを朗々と語り、約1000人の聴衆は、レジェンダリー・マウンテンアークと紹介された日下田さんの言葉に聞き入っていた。ここでは小林会長の英語スピーチに期待が懸かっていたのだが、大統領のスケジュールと式典進行の都合で実現しなかったことが、唯一悔やまれる。

本年が、マナスルとローツェの初登頂から60年ということで、公式式典は両峰合同での開催であった。このため、駐ネパール・スイス大使も60年前のスイス登山界について触れながら、実に興味深い演説を行なった。1952年春のスイス隊は、世界最高峰に肉薄したのであるから、欧州列強とは言い難い小国スイスが、いかに山岳分野で秀でていたかを言いたかったのだろう。

この式典の終了前には、ドキュメンタリー記録映画『マナスルに立つ』の英語字幕入りダイジェスト版の上映を行なった。数百人がスクリーンに入り、今西寿雄隊員とギャルツェン・ノルブ隊員の登頂シーンでは、会場から大きな拍手が沸き起こったのである。

ネパール大地震救援募金の贈呈

昨年4月25日、ネパールが未曾有ともいえる大地震に襲われてからちょうど1年である。本会は日本の主要山岳団体5団体と協力し、6団体で募金活動を行なってきた(公報5月号参照)。そこで贈呈式がまだ行なわれていなかったネパール側の2つの団体(ロールワリンの学校再建、サガルマータ汚染管理委員会のゴミ焼却炉)には29日の前夜祭で、本会小林会長から6団体名が刻印されている銘板を寄贈し、30日の式典では、八木原啓明・日本山岳協会会長がNMAへ寄付金を贈呈した。



日本の山岳6団体の援助で再建されたロールワリンの学校

●マナスル初登頂60周年および国民の祝日「山の日」施行記念事業参加申込み受付中

「マナスル」から「山の日」まで60年、いま未来に伝えること

日時：平成28年7月10日(日) 10時15分

会場：JICA市ヶ谷ビル(JICA地球ひろば) 新宿区市谷本村町10-5

参加費：無料

(1)映画「マナスルに立つ」短縮版上映

(2)特別講演①：日下田實

(3)特別講演②：石川直樹

(4)公開座談会：傘木靖、村越真、小林千穂、花谷泰広、座長：萩原浩司

(5)展示会

・マナスル登山に関する日本山岳会所蔵品展示

・会員所有のマナスル登山時代の装備の展示

・自然保護委員会、高尾の森づくりの会の展示

・「山の日」関連の展示と情報提供

・最新の装備、未来の装備紹介

・ネパール大地震の実態と復興支援に関するパネル展示

・キッズルームを開設し、お子さんの一時保育を行います。

・当会監修「山のお弁当」発売を記念して、会場で販売します

(要予約。お茶付き900円)。

《申込み》講演・座談会は先着順(190名)

・Webでの申込み：
<http://www.jac.or.jp/mana-yama/m.html>

・ハガキでの申込み：〒102-0081 東京都千代田区

四番町5-4 公益社団法人日本山岳会 マナスル係

・ハガキ裏面：「7月10日参加希望」とご記入の上、①氏名②

電話③参加時間帯「午前・午後・全日」のいずれか④弁当

注文の有無をお書きください。

《問合せ》大久保(yqb00247@nifty.com)

マナスル初登頂60周年記念トレッキング マナスル西面・ビムタンへの山旅11日間

小林博史

マナスル(8163m)は、ネパール・ヒマラヤの中央に位置するマナスル山群の主峰で、1956年5月9日に、日本山岳会隊が初登頂を成し遂げた8000m峰である。その初登頂から60年目を迎えて、戦後復興の象徴ともされた輝かしい功績を讃えるべく、カトマンズにおいて記念行事が開催された。その一環として行なわれたのが今回の「マナスル西面トレッキング」である。

我々一行(ツアー実施IIアルパインツアーサービス)は、トレッキングのスタート地点にアプローチすべく、ネパールの首都カトマンズから陸路でアンナプルナ山群とマナスル山群に挟まれた大渓谷である、マルシャンディ渓谷の中心ベシサルに向かった。ここから車両を四輪駆動のジープに乗り換え、さらに上流に位置するダラパニを目指した。近年、ネパールは山岳奥地へのインフラ整備が著しく進展しており、マルシャンディ渓谷も例外ではなかった。

10年ほど前までは徒歩でしかアプローチできなかった渓谷の奥地に、突貫工事で造られた荒々しい未舗装道路が通じ、何台ものジープやインド製のトラックが往来している。道中には中国系資本が建設を進めている水力発電ダムがあり、漢民族の現場監督がネパール人を指揮していた。ネパールののどかな田園風景とは対照的な光景に少し胸を痛めたが、この道路の開通により、マナスル西面へのアプローチは格段に良くなったのは事実である。

ジープでアプローチできるダラパニから、わずか2日間のトレッキングでマナスル主峰を直線距離にしてわずか12kmの位置から展望できる別天地・ビムタンに到達できるようになったのである。このビムタンこそが、今回のトレッキングの目的地となる。

ダラパニでマルシャンディ渓谷に別れを告げ、北東方向に分岐するドウードウ・コーラを遡上する。ジープが往来するマルシャンディ



ビムタン上部から望むマナスル主峰(左)とブンギ(右、6538m)

渓谷とは対照的に、ドウードウ・コーラの谷沿いにはのどかな農村地帯が美しく点在し、エベレスト街道やアンナプルナ山群に比べトレッカーの往来も極めて少ないのが特徴だ。サマ方面から標高5135mのラルキャ・ラ(峠)を越えてきたマナスル・サーキット・トレイルを歩くトレッカー数組とすれ違う程度であった。この山域はロτζジの部屋数も少ないため、近年のネパール・ヒマラヤでは珍しくなったテント泊トレッキングを楽しむことができたのも大変良かった。このルートは、1952年に日本山岳会マナスル偵察隊が登路を調査した際の行程の一部でもある。

り、当時の様子に想像をふくらませながらビムタンへと歩みを進めた。

広大なアブレーション・バレー(氷河側谷)にあるビムタン(3590m)は、周囲を6000(8000m級の高峰に囲まれた別天地で、マナスル主峰をはじめ、とにかく山が近いことに皆が感動した。ビムタン到着直後から降雪となり、トレッキング・テントがつぶされないよう、想定外の除雪作業となつた。

翌朝、ビムタンは一面の雪景色に変わっていた。周囲の山々は新雪に輝き、山との距離がさらに縮まったようにも感じられ、より迫力を増したマナスル山群の展望を楽しむことができたのである。

ビムタンには3連泊し、滞在日にはサイド・モレーンを越えて、2006年9月29日に日本山岳会学生部隊が初登頂した、パンバリ・ヒマール(6778m)直下にあるポソンカール湖(3965m)まで往復することができた。湖畔にはサクラソウが見事に群生しており、春の訪れを感じながら、60年前のマナスル初登頂に思いを馳せたのである。

創立100周年記念科学調査隊

氷河調査フライトと現地調査行のご案内

大森弘一郎

本会報の昨年9月号でご案内しました学術調査隊ですが、計画実施をプレ・モンスーンからポストに変更して、改めてご案内申し上げます。

氷河調査をより有効に、また楽しくするために、計画を以下のように変更しました。まず、クーンブ全域の「氷河の今」を記録するために飛びます。氷河の基礎データを作り、次に現地に行きます。多くの方に調査成果を共有していたために、「氷河マウンテン・フライト」を加え、好天率の高い時期にしました。最適な天候をつかむために、山岳気象予報士の猪熊さんに協力してもらいます。

温暖化の影響で変化が進む氷河の今の姿をまず写真記録に残し、将来の研究に供します。全域を飛んで調べた後、その一つのごジュンバ氷河を現地調査します。山と氷河を見てから現地に行き、対策を考えるのです。

「氷河マウンテン・フライト」は、時速400km、旋回半径5kmの双

発高翼機ドルニエです。この機を2〜3回チャーターし、ルクラを起点にして少人数で山中を飛びます。7500mの高度で、いかに山に接近して氷河の中を縫って上手に飛ぶか、をやらせます。最良のコースを飛ばせることをお約束します。氷河を写す人は氷河を、山を写したい人は山を。バルン・ツエ、エヴェレスト、チョー・オユー、国境の近くからチベットも見えます。

飛行機から見える情報は無数です。これを自由に写し取ります。そして、その位置・高度と時間を正確に記録します。写真の時間記録で位置を同定し、公開して将来への基礎資料として残すのです。座席と人により見る物が違いますので、人数に比例して収獲は多くなります。写真は写した方の物ですから、調査のほかにいろいろ活用してください。

フライトは全員で、その後はF隊、E隊、G隊に分かれます。

【F隊】マウンテン・フライト中心

の行動(1週間で、最短日数の計画。フライトの合間にルクラ周辺をトレッキング。行程Ⅱ日本発10月10日〜17日帰国、カトマンズ↓ルクラ、ルクラから氷河マウンテン・フライト2日/2フライト、15日ルクラ↓カトマンズ、費用Ⅱ個人負担39万円

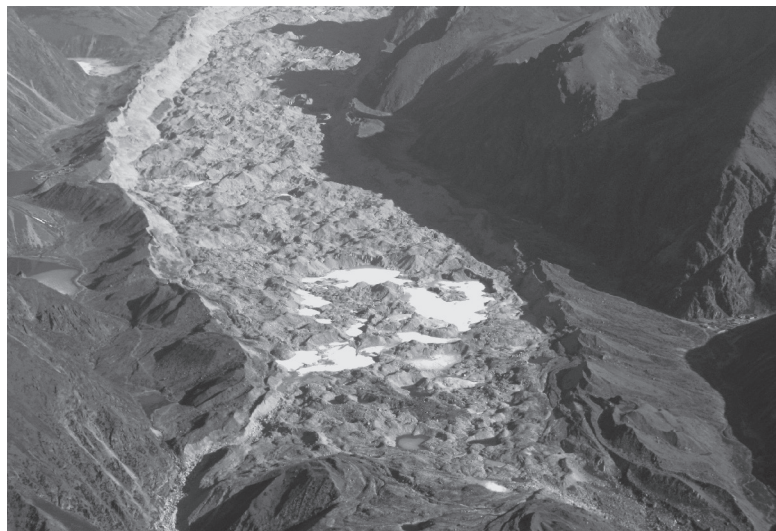
【E隊】マウンテン・フライトとエベレストビューホテル・ミニトレック(2週間)。氷河

と山を飛んだ後、エベレストの見えるエベレストビューホテルへ。行程Ⅱ日本発10月10日〜23日帰国、F隊と同じ行動の後、

ルクラ↓ナムチェ・バザール↓クムジュン↓エベレストビューホテル(泊)↓ルクラ↓カトマンズ、費用Ⅱ個人負担47万円

【G隊】マウンテン・フライトとゴジュンバ氷河調査(4週間)。

E隊とクムジュンで別れてゴジュンバ氷河調査へ。行程Ⅱ日本発10月10日〜11月



空から見たゴジュンバ氷河の氷河湖形成部

7日帰国、クムジュン↓ドーレーマツチエルモ↓パンガ、氷河のモレーン上に幕営、氷河池調査(7日間)↓撤収↓ドーレー↓クムジュン↓ルクラ↓カトマンズ(ICIM OD報告)↓帰国。費用Ⅱ個人負担59万円

*計画の詳細については大森宛お問い合わせください。

✉ zero@qb3.so-net.ne.jp

マナスル初登頂60周年

栄光の陰で——マナスル苦渋の2次隊

江本嘉伸

マナスルの初登頂から60年。14座しかない8000mのジャイアンツの一角に、日本人が初登頂の足跡を残したことはすばらしいが、登山世界の未来のために、2次隊の痛恨の失敗を忘れないことも大事なことだと思う。1954年の2次隊で何が起きたのか、そこから私たちは何を知るべきなのか。

「隊長を押し付けられた」堀田弥一さん（2次隊隊長。2011年2月23日、102歳で逝去）が生前、私に話されたことを含めて一度、振り返っておきたい。

京大から日本山岳会に「移譲」

マナスルはそもそも、日本山岳会の計画ではなかった。京都大学農学部動物学教室を拠点とする「生物誌研究会」(Farm & Frola Research Society 略して「FF」)という組織が端緒だった。ヒマラヤ登山のために戦前、今西錦司らがつくった「AACK(Academic Alpine Club of Kyoto「京都大学学士山岳会」)」はまだ復活しておらず、今西たちは、FFを学術探検のための

組織と位置付けて動き出したのである。

スポンサーも毎日新聞に決まった。しかし、肝心の山をどこにするか。エヴェレストは英国隊に譲るとして、フランス隊が登ったアンナプルナより高い山がいい。そんな議論の中から「情報が少ないが、ルートさえうまく見つければ、尖っているところがかえってねらいだ」と、マナスル攻略すべし、の方針を今西は打ち出した。

1952年1月、インドのカルカタで開かれる国際科学会議に、AACK創設当時から会長でもある、遺伝学者の木原均が招待されたことが具体的な一歩となった。木原に西堀栄三郎が同行し、なんとかネパールに入り、交渉を開始した。その結果、親日家の將軍の口利きで「マナスルは日本隊で」と国王が指示してくれたのだ。西堀はマナスル踏査隊の許可申請をFFの名で提出し、1952年3月14日、帰国した。

西堀の話聞いた今西は、京大

だけでなく、この時点で日本の登山界挙げての計画にしよう、と進路変更した。なぜ今さら、と反論もあったが、オールジャパンの思想が正しい、と考えたのであろう。FFはこの計画をすべて日本山岳会に移譲すると提案、1952年4月16日、日本山岳会は正式にマナスル計画の全責任を負うことを決定したのである。

登山を実行するために「ヒマラヤ委員会」を組織した。委員長横有恒、委員に藤島敏男、日高信六郎、今西錦司、堀田弥一、木原均、松方三郎、三田幸夫、西堀栄三郎、のちに早川種三を加えた。1936年、インド・ヒマラヤのナンダ・コット(6867m)初登頂を成功させた立教の堀田は、なくてはならない顔だった。

「あまりにも空しき敗退のエクスペディション」

知られているように、マナスルは1952年、今西錦司を隊長とする踏査隊が初めて現地入り、53年には三田幸夫隊長率いる1次隊が頂上まで375m地点まで迫った。そして、54年の2次隊の準備に入る。1次隊の中核となった村山雅美、加藤喜一郎、村木潤次郎、

山田二郎の4人が「実行委員」となつて2次隊の計画を練り上げ、隊長として慶応出身の谷口現吉を推薦した。1次隊のときから隊のあらゆることに関わり、メンバーとの信頼関係もあった。しかし、谷口は知名度という点で問題があった。日本を代表する登山隊の「隊の顔」としては谷口でいいの、か、リーダーシップを発揮できるのか、という危惧がヒマラヤ委員会と毎日新聞から出た。特にスポンサーである毎日新聞はこたわった。

しかし、この隊は散々だった。山麓のサマ集落で住民たちの激しい抗議に遭い、ベースキャンプ地点までも入れないという無残な結果となった。「わが1954年マナスル隊は、あまりにも空しき敗退のエクスペディションであった。その成果に見るべきもの無く、のこすに足る記録として無いが……」と、公式報告の冒頭で、副隊長格の谷口現吉が書いている。

泣く泣く隊長を引き受ける

その2次隊の隊長を引き受けた堀田弥一さんに東京・荻窪の自宅電話を聞いたのは、2006年4月13日と7月6日の2回、堀田さん97歳のときだった。

「もう97だからね。時代が20年前も50年前も今も、どっちが先になるか分からない。要するに、聞く人が分からないと駄目」と、こちらがしっかりと堀田さんの話を読み取るように、とお願ひされてしまった。意外に饒舌で、確かに話はあつちこつちに飛ぶが、慣れると、話の糸はつながるのだった。

堀田さんは日本人初のヒマラヤ登山を成功させ、登山史に名を残している人だ。しかし、マナスル2次隊の隊長を依頼されたときの模様を聞くと、苦い顔になった。

「まず、あのときは体調が悪くてヒマラヤに行つて指揮を執る自信が全くなかった。何よりも隊員のほとんどがすでに固まっていたから、隊長としての仕事はできないと思つたんだ」

「僕は当時45歳、会社で課長という一番実務の大事なポストでね、正直、ヒマラヤなどに行く状況ではなかったんだ。でも、徹夜で口説かれてね、最後はもう涙がぼろぼろ出てきて……。逃げて逃げて、最後、不本意な形で引き受けさせられた」

歴史的なヒマラヤ登山において、こんな形で隊長が決まったとは、

本人の口から聞いて改めて呆然とした。

「体調も悪かった。僕は好き嫌があるんでね、持つて行つたものが全く食べられない。胃が悪くなつてね。隊長テントに独りでいると、いろんな情報を持つてくる。」

ヒマラヤで飯を食べられないほど、つらいことはない。本人も気の毒だったが、飯を食べない隊長を戴いた隊員たちも、気の毒だった。隊全体の士気に大いに影響しただろう。それにしても、泣いて固辞する登山家を、徹夜で説得するとはびっくりだ。

少年は木に縛り付けられた

そして、2次隊を打ちのめす「サマ事件」が起きた。1954年3月、カトマンズに集結した一行は、3月20日から奥地へのキャラバンを開始した。不吉な情報が続々に入ってきた。



晩年の堀田弥一さん

「アルガト・バサルを過ぎるころから、奥地不穩の情報は隊の前途に暗い影をもたらし始めた。……前年日本隊の帰還後はまれにみる旱魃で収穫は例年の半ばにも達しなかった。しかもその冬の降雪は多く、三百年の伝統を誇った僧院(ゴムパ)が大雪崩に圧壊されラマ尼三名が死んだ。いまサマには天然痘が大流行である。これはすべて聖山カンブンゲをけがした日本隊の所業に対する神罰である……」(『マナスル1954』6から)

ローの部落に入ると、手に手に鉈、鉋を持った村人が角々に立ち並び、口々に「どこへ行く」と陰しい表情で誰何する。以下、渉外担当の村山雅美の記録。

「サマの手前1時間ほどのところにマナスルを見あげる芝地がある。ここで泊まる予定だった。手に手に斧を持った30人ほどの村民が立ちあはだかるのをなだめつつ、なんとかテントを張る。夕食時間になつても隊のキッチンで働くドルジ少年がいない。なんと村人たちにつかまつて、木に縛り付けられて

いるとわかった。サマ出身なのに日本隊で働くとは何事か、と村人の怒りを買ったのだ。なんとか彼を引き取ることはできたが、厄介はそれからだった。」

「4月6日、サーダー、通訳とともに渉外担当の私がサマのラマ僧に会いに行つた。200人の村人に取り囲まれての交渉は厳しいものだった。

赤い絨毯の席に着いたラマ僧兄弟の前に村人の頭ダ・テンジンほか数人の住民代表と我々が円陣に胡座をかいて会談が始まった。敵意に満ちた空気を弟ラマ僧と、テンジンが煽り、住民たちは「不作や疫病の原因は日本隊にあり」と、前年ラルキャ集落での日本隊のシエルパと住民が乱闘した際の恨みつらみを口々に言い立て、日本隊の退去をラマ僧に訴えた。」

宗教的な理由なのか、一種の経済闘争だったのか、サマの問題の全容については今はつきりしてはいない。ともかくも村での長い交渉の末、最後の望みを託したヘッド・ラマが「ノー」を言つて、マナスル登山はベースキャンプにもたどり着けずに終わった。やむなく隊はガネツシュ・ヒマールに転進、マナスルは1956年の3次隊に任されることとなる。

REPORT

野口健さんのマナスルとネパールへの貢献

南井英弘

先ごろ日本の山岳6団体が集めたネパール大地震復興支援募金が、ランタン村の再興など各方面に贈呈されたが、日本山岳会会員である野口健さん(会員番号11744)も10年以上前から、清掃登山はもとより、さまざまな援助活動をネパールで実施していることを、改めて皆さんに知っていただきたいと、筆を執った次第である。

実は筆者は、アラブ駐在6年のキャリアを活かして、日本アラブ協会の事務局長を永年務めていたため、中東担当の外交官・大使であつた野口さんのお父さんやご家族とは、旧知の間柄であつた。そのような縁で、野口さんが興されたNPO法人「セブン・サミッツ(現・認定NPO法人ピークエイド)」の設立段階から協力を依頼され、副理事長を引き受けている。

1999年5月、3度目の挑戦でエヴェレストの登頂に成功し、野口健さんは世界7大陸最高峰・最年少(25歳)登頂記録を更新した。その折、ヨーロッパ隊が彼らのテ

ントの周囲でゴミを拾い集めているかたわらから、日本隊が残した古いゴミが大量に出てきた。「日本は経済は一流だが、文化やマナーは三流だ!」と彼らから罵られた。そんなことで、翌年から4年間、エヴェレストの登山道周辺に残されたゴミ拾いを実施し、高所の氷河上に置き去りになった遺体の収容などにも務めた。また、エヴェレストの近くでは、初登頂を果たした英国隊のエドモンド・ヒラリー卿が山麓の村人に感謝し、子どもたちの教育や福祉、環境保全活動を継続しているのを見ていた。記者会見のとき、現地の記者から「日本人が初登頂したマナスルはいかがか?」と質問されたのが気になったという。

マナスル山麓のサマ村に小学校を建設し寄贈

日本隊マナスル初登頂50周年の2006年4月から5月にかけて、40日にわたる「野口健マナスル清掃登山」を実施した。現地では「Japanese Mountain」と呼ばれ、村



サマ小学校の寄宿舎を背景に笑顔の子どもたち

人も親切に接してくれた。自分たちもサマ村の子どもたちに夢を与えることができるとは思わなかった。村人たちと話し合いを重ね、彼らの一番の要望である小学校の寄贈を決意、「マナスル基金・教育支援」を立ち上げた。その後、会合を重ねるうちに、ラマ僧がたびたび通っているマレーシアからある程度の寄付金を募ることができると、提言があつた。当時、当方で集まった基金(約1000万円)で建設できる

大型の寄宿舎、キッチン・食堂、トイレを引き受け、マレーシア資金で校舎建設の協力を得た。

翌年からサマ村での精査、政府への学校建設申請、本格工事着工などを経て、2010年11月、当初計画の寄宿舎付き小学校が完成

した。教員はネパール政府から派遣され、NEPAL SEEDSと称する学校教育、環境指導を主目的とする慈善団体から給食費の支援などを得ながら、村が学校を運営している。

近隣の村を含め、一時は1000人の児童が寄宿舎生活で学んでいた。現在は隣村にも学校ができたため、約50人が学んでいる。2015年4月、大地震で一部破損箇所が出たため修理の必要性があり、多少の不便をかけているが、子どもたちは元気に学んでいるのが何よりだ。また、本年からサマ村の森林再生計画を実施し、住民の環境意識向上に努めている。

ちなみに筆者は、2005年の日本山岳会創立100周年、並びに翌06年のマナスル初登頂50周年に、大蔵喜福氏を隊長とするマナスル登山隊に参加しているが、彼とは同時期にJAC理事を務めていた間柄である。その当時、1996年末ごろ、6大陸最高峰の登頂を終えた野口さんが、最後に残されたエヴェレスト挑戦へのアドバイスを求めている。大蔵さんを訪ねてきた。「学生で面白いのが来たから、一緒に応援して欲しい」と

大蔵さんに言われたのが、筆者と野口さんの出会いであった。

ネパール大地震被災地クーンブ、サマ地区などへの援助

野口健さんは、ゴークヨからエヴェレストBCに向かう途中で大地震災に遭遇し、多くの家屋やゴンパが崩壊するのを目の当たりにした。広範囲の大きな被害を観察して復興支援の必要性を痛感し、現地にいながら震災の翌日「ヒマラヤ大震災基金・目標額1億円」を立ち上げ、その後もヒマラヤ山中に3週間残留し、各地の被害状況をつぶさに調査した。

モンスーンの雨季が迫った山麓の住民は、まずは雨露をしのぐテントが必要なことが分かった。数名の家族が一緒に生活し、家代わりに住むことができる背の高い大型のテント(580張)を素早くインドに発注した。これらをエヴェレスト街道沿いのクムジュン村、クンデ村で279世帯、ゴンパと地元組合に21張の合計300張、ロールワリン地方に30張、サマ村に182張、サンボ村に41張(総計で約2640万円分)を可及的速やかに、600頭の馬やロバを使って配送し、各戸に配布した。

また、家屋やロッジの再建には現金が必要であり、総計4450万円を支援した。内訳はクムジュン村とクンデ村では、1世帯当たり均等に\$1250(15万円強)を、265世帯に計約4200万円、トクトラ村とルクラ村にそれぞれ125万円。このほかにロールワリン村ベディン周辺集落の移住費用として72世帯に\$734(約9万円)、総額640万円の支援をしている。

このように基金の立ち上げが早かったのが功を奏した。募金額も順調に集まり、2015年内に当初の募金予定額を集めることができ、うれしいことに登山仲間のシエルパたちや住民の協力を得て、



クムジュン村に急遽設営された大型テント群

素早く被災者に直接配布することができたのだ。また、ありがたいことに、本年に入ってから募金して下さる個人や法人のご理解を得ており、壊滅したターメ村からの要望でコミュニティ・ホールの建設(約750万円)、シミガオン村のゴンパの建設(約1000万円)など支援を継続している。

シエルパ基金を開設

ヒマラヤ登山隊に同行した父親を、遭難で亡くしたシエルパの遺児たちの教育支援活動であり、国際協力事業として12年目になる。発足当初は、小学校1年生入学から預かった子どもたちを小・中・高等学校卒業まで10年間、面倒を見る計画であった。しかしここ数年、高卒では就職難であることに鑑み、後2年間、カレッジ卒業まで面倒を見ることにした。現在、12名が在籍しており、本年、2人がシエルパ基金による12年間の学校生活を終え卒業する予定である。当初は遺児たちをカトマンズの学校に通わせていたが、現在は子どもたちの環境によって、従来どおりカトマンズで学ぶ子どもたちもおれば、地方の学校に通う子どもたちもいる。

●「旧秩父宮殿下ヒュッテ」修復保存募金のお知らせ

日本山岳会と縁の深い故秩父宮殿下が1928(昭和3)年に建てられた「旧秩父宮殿下ヒュッテ(現・空沼小屋)」が老朽化のため、所有者の北海道大学を中心に募金活動中です。会員の皆様もご協力いただければ幸いです。
<http://aach.ees.hokudai.ac.jp/x/modules/Doc/soranuma/bokin.html>

*ご寄付の振込先…北洋銀行道庁支店 普通3545777
 空沼小屋保存基金(ソラヌマコヤホゾンキケン)

*お問合せ先…空沼小屋の保存を考える会事務局 〒060-0815 札幌市北区北17条西12丁目 北大山岳館内 TEL 090-19528-11084(松田)

FAX 011-221-1663

✉ maedajin@frontier.hokudai.ac.jp
 ●「ネパール大地震募金の「寄付者一覧」に関する訂正

本会報4月号4ページで発表しました「「寄付者一覧」の一部を訂正させていただきます。
 「5・4万円 荒川一郎」とあるのは、正しくは「木下是雄記念会」です。

8月11日は国民の祝日「山の日」

第1回「山の日」記念全国大会 上高地と松本市内で開催

初めて迎える国民の祝日「山の日」。この8月11日には北アルプスの上高地と松本市内のまつもと市民芸術館で第1回「山の日」記念全国大会が開かれる。主催は全国山の日協議会、長野県、松本市、上高地町会、関係する8省庁など官民で構成する実行委員会だ。

午前中に行なわれる「記念式典」の会場は上高地のバスターミナル。

《美しく雄大な自然の中から、「山の日」の意義と山の魅力、大切さを世界に向けて発信する》とコンセプトに謳っている。国歌斉唱、挨拶の後、楽都、松本にふさわしい楽曲演奏、「山の日」宣言など。9時過ぎに始まって1時間のセレモ



ニーを予定している。会場の広さの制約から参加者は招待者、関係者などに限られる。

午後は会場を市街のまつもと市民芸術館に移しての「祝祭式典」。1000人規模で半数程度を一般公募する。《山の恩恵に感謝しつつ、ともに集い、ともに祝う。山の未来を考える》がコンセプトで踊りや歌、映像などのプログラムが用意されている。

また前日の10日には午後から市内の会場で、日本を含め山に関係の深い各国の代表が、長野県内の高校生や観光関係者、NPO代表らと「山」をテーマに話し合う。その後はホテルで、翌日の式典参加者を歓迎するレセプションが準備されている。

「山の日」記念全国大会の松本開催は1年以上前から決まってお、山岳県・長野と岳都・松本市はこれをPRの絶好の機会と捉えて、1億円以上の事業費を投入したといわれる。大会のアピールのため全国の小・中・高生に呼びかけて

「山への想い」を表現するキャッチ・フレーズを募集し、全国大会のロゴマークも作った。絵画展『遙かなる山へ 発見された風景美』（松本市美術館、7月16日から、日本山岳会所蔵の4点も出展）の開催もこの時期に重なっている。

《山に関する歴史や文化、環境、観光、安全、教育等の「山と人」との関わり方を見つめ直し、様々な課題の解決につながる契機にする」とともに、次代を担う子どもたちと一緒に「山の未来」を創造する第一歩とすること——大会開催の理念である。その理念がどこまで活かされ、どんな第1回記念大会になるか、期待したい。

2回目以降はどこで開くか。選定方法を含め、全国山の日協議会などで検討中である。いくつか開催地候補はあるようだが、地域の特徴を活かした「山の日」記念行事が《山と向き合ういちにち》として長く続くことを祈念したい。

(成川隆顕)

「山の日」記念切手の発行

8月10日からの発売が決まった。82円切手10枚が1シートで、90万シートが全国一斉に。北海道(大雪

山)、東北(岩手山)、北アルプス(槍ヶ岳)、中国(大山)、九州(くじゅう連山)の代表的な5つの山と、その山の動植物が組み合わされている。

「山の日」の記念歌発表へ

昨年の8月に歌詞募集を始め、年末締め切りで1850通の応募があった。審査会を開いて演歌系、ポップス系それぞれ最優秀作、優秀作が決まり、叶弦大さん、都倉俊一さんの作曲でレコーディング中。歌うのは北島三郎さん、加藤登紀子さん。松本の記念大会に合わせてCDが発売される。

一般財団法人全国山の日協議会に

任意団体だった全国「山の日」協議会が4月1日から一般財団法人になった。法人設立の目的は祝日「山の日」の意義を広く国民に周知し、「山の日」に関わる諸分野の課題を研究し、発展させること。記念大会の開催など事業内容は変わらないが、会員を増やし、長期展望に立つて財政基盤を固める狙い。日本山岳会は引き続き会員である。

「山の日に向けて」山を考える①

山を考えるための10冊の本(下)

近藤雅幸・永田弘太郎

●山村を旅し出会う風景がある
岡田喜秋『定本 山村を歩く』

山と溪谷社、ヤマケイ文庫、2016年

山の懷に抱かれたのどかな山村山への行き帰りでその中を歩いていると、懷かしく、温もりに満ちた郷愁が湧き上がってくる。今は

少なくなつてしまつた原風景。アプローチにそんな風景があるからこそ日本の山である。本書では紀行文学の泰斗が、峠道をたどつたり、山を眺めたりしながらふと立ち寄つた山村とそこに住む人々を温かく、優しさに満ちた視線で描いている。

●古き時代の日本の山と人々を記録
ウオルター・ウェストン／岡村精一訳『日本アルプス 登山と探検』

平凡社、平凡社ライブラリー、1995年ほか

日本山岳会は、小島鳥水と岡野金次郎がウェストンと出会つたのを契機にして設立されたのはよく知られた話である。ウェストンは、

それ以前に日本アルプスをはじめとする、日本の山を先駆者として涉猟跋扈していた。本書はその紀行である。いわゆる日本におけるスポーツとしての登山の原点。書かれてからすでに100年以上たつが、その内容は今でもみずみずしい。

●山岳信仰から日本人の心を知る
鈴木正崇『山岳信仰』

中央公論新社、中公新書、2015年

修験道の活動を中心に、人々の心のよりどころとなつた山岳信仰の実態を紹介。山と日本人の関わりを描き出す。出羽三山、大峰山、英彦山、富士山、立山、恐山、木曾御嶽山、石鎚山における山岳信仰の歴史や祭祀・芸能などが詳述されており、日本の文化の根底にある山岳信仰を通して、日本人の抱く「山」を知ることができる。

●山の信仰を多角的に捉える
宮家準『霊山と日本人』

講談社、講談社学術文庫、2016年

原始から今日に至るまで、日本人は山や森を信仰の対象としてきた。日本人の生活と切り離せない山岳信仰や森の信仰を歴史的、地域的に捉え、さらにはそれぞれの山の神の性格やその関連性、山伏などの宗教者の活動、鬼や天狗などの異人・眷族、そして山の祭など、複数の切り口から解説。日本の山と信仰の関わりを包括的に捉え、凝縮した一冊。

●歴史的考察と調査による里山の可能性
養父志乃夫『里山里山文化論―循環型社会の基層と形成―上・下

農村漁村文化協会、2009年

日本の山を知る上で欠かせないのが里山。山は縄文時代から食料や燃料の供給地として利用され、日本の文化や人工の「自然」を形成してきた。上巻では日本列島での生態系の形成からそれを育んできた里山の発展の歴史、また、里山文化の源流として東アジアの暮らしと生態系がレポートされ、下巻では昭和初期の里山が紹介されて、その再生および持続的循環型社会への可能性が語られる。

「山の日」メモ

国民の祝日「山の日」がどこまで知られているか。2年前、祝日制定直後の日本リサーチセンターの調査では「山の日」ができて、それが8月11日であることを知つていたのは39%だった(1200サンプル)▼最近のデータはないが、認知度はかなり高くなっているようだ。グーグルやヤフーなどネット上でも情報が多くなっている。しかし、「山の日」の趣旨に思いを巡らせ、有意義な過ごし方をと考える人は、残念ながらそう多くはなさそう。休日増を喜ぶだけでは《よりよき社会》より豊かな生活を築きあげるため国民こそつて祝いの、感謝する」という祝日制定の意義が生かされないことになる。

▼8月11日は山に親しむ機会として祝日になった。恵みに感謝する一方、壊れやすさと厳しさを併せ持つ日本の自然、列島大地、山の厳しさを考える日である▼祝日制定が決まつた2年前から、私たちの「山の日」の意義周知のための取り組みが始まつた。間もなく最初の祝日を迎える。どこにいようと《山と向き合い、いのちを考える一日》にしたい。(成川隆顕)

Climbing&Medicine・72

手軽な階段昇降 踏み台を大いに利用 大野秀樹

筋肉の活動様式中、短縮性(筋が短縮しながら力を発揮する)プラス伸張性(筋が伸張されながら力を発揮する)筋活動が、筋力の増加に最も有効である。前者は主に遅筋線維が、後者は主に速筋線維が使われ、それぞれ脂質、糖質が主なエネルギー源になる。登山では、登りが短縮性、下りが伸張性筋活動に相当する。実際、2ヶ月間、歩いて山(標高差540m)を登りリフトで下りたグループは脂質代謝が改善し、リフトで登り歩いて山を下りたグループは糖質代謝が改善した(Drexel, H. et al., 2008)。とくに、伸張性筋活動は筋の微小損傷・炎症を起こし、2～3日後に遅発性筋肉痛が生じる原因となるが、この微細構造破壊の回復過程において衛星細胞が強く活性化されて筋肥大が生じる。すなわち、伸張性筋活動は、骨格筋肥大や筋力アップに不可欠である。

こうして、両方の筋活動を伴う登山は、筋力トレーニングに最適なスポーツのひとつであり、生活習慣病にも有効なことが示唆される。登山のトレーニングは、低山も含めて実際に山に登ることがベストである。しかし、一般の運動トレーニングのように週に何度も登山を行なうことは現実的ではない。そこで、手軽に両筋活動が実施できる階段昇降と踏み台昇降を推奨したい。

体重55kgの25歳の女性が30分間階段昇降し

た場合、上りだけでは213kcal、下りだけでは104kcal、昇降では158kcalのエネルギーを消費する(日本体育協会スポーツ科学委員会)。上りの消費エネルギーは、軽いジョギングの218kcalに匹敵する。下りだけでも分速70m歩行の98kcalよりも多く、昇降では分速90m歩行の143kcalよりも多い。1回30分間、週3回以上実施するのが望ましいが、少なくとも1回20分以上、週2回は行ないたい。



階段昇降は、1回20分以上、週2回は行ないたい。

ただし、5分、10分と細切れに行なっても合計が20分以上になればよい。この運動によって下半身を強化できるばかりではなく、心肺機能も強化される。階段に手すりがあれば、高齢者でも安全に実施できる。

一方、体重55kgの20代の女性が30分間踏み台昇降をした場合、141kcalのエネルギーを消費する。これは階段昇降に近い値だ。20cmの高さの踏み台に任意の足から乗り、両足で立ち、上った足から下り、両足で立ち、次は反対の足から乗り……を10分間繰り返して1セットとする。少なくとも2セット、できれば3セット、週3回以上行ないたい。階段昇降に匹敵する効果が期待できる。

このように、階段・踏み台昇降ともに2ヶ月以上行なうとさまざまな運動効果が得られるが、「実際の登山で役立つのか」は意外にもまだ一定のコンセンサスが得られていないようだ。ぜひ、皆さんの情報に期待したい。

なお、過去のコラムは次の手順でご覧になれます。ご活用ください。

日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→医療委員会 <http://jac.or.jp/info/iinkai/iinkai.html>

図書受入報告(2016年5月)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
やぎた晴	山小町 愛 (Yamakei Creative Selection Frontier Books)	322p/19cm	山と溪谷社	2016	著者寄贈
高木勉	われ、八甲田より生還す：弘前隊・福島大尉の記録	215p/19cm	サンケイ出版	1978	鈴木和男氏寄贈
松木明知	八甲田雪中行軍遭難事件の謎は解明されたか	269p/19cm	津軽書房	2012	鈴木和男氏寄贈
永野敏夫	静岡の山：日帰りコース158	352p/21cm	羽衣出版	2016	大島康弘氏寄贈
井上達男(編)	山と人 第20号：念青唐古拉西山群 バダリ峰試登・タリ峰初登頂	209p/26cm	神戸大学山岳会・山岳部	2016	発行者寄贈
Harish Kapadia	Trekking in the Himalayas	512p/20cm	Outlook Traveller	2016	著者寄贈
Nandini Purandare (ed.)	The Himalayan Journal 2016 (Vol.71)	368p/22cm	The Himalayan Club	2016	発行者寄贈

東西南北

N

S

秘峰登山のススメ(上)

西川元禧

山に登り始めて、どの山にしようかと考えるときにまずは近郊の山々に登り、さらに範囲を広げて富士山、立山、白山などの有名な山、百名山、三百名山などと広がつていく。

登ってみると、さすがに昔から親しまれた山だけにアプローチも便利だし、登山道も整備され人も多くて、なんとなく安心。周囲の山よりもひと際高いとか展望が良いと気分も高揚するし、皆が登る山に自分も登ったという満足感も生じる。

ただし、ときには頂上に着いた途端、銀座の支店ができたのか？と思うくらい、人で混雑していることもあり、そんなときは都会の雑踏を忘れて静かな山に身を置き

たいと、ふと思うこともある。

そんなときお薦めなのが秘峰登山である。もちろん、秘峰の中にはたとえば青森県下北半島の大作山(776m)や岩手県北西部にある黒森山(972m)のように、一等三角点があるのに踏み跡すらなくヤブを漕いで登る山もある。ここでは、そういう苦勞をしないで、少なくとも踏み跡があり楽しく登れて、百名山や三百名山にはない静寂を味わえる秘峰を紹介したい。

北から順にまず北海道では大雪山の白雲岳(2230m)をお薦めしたい。百名山や三百名山を目指す人は一般的に、山塊の複数あるピークのうち最高峰に登ったら「その山塊は登った」とする。例えば大雪山は最高峰の旭岳(2290m)に日帰りで登ったら「大雪山に登った」ということになる。私は山塊全体を知るためだけにすべてのピークに登ることにしてい

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします)

る。大雪山の場合も1週間かけ幕営しながら20近くのピークに登った。そうすることによって、登山者の多い旭岳に対してほかのピークでは貸切の山々を楽しむこともできるし、縦走路のお花畑や湿原を含めて、変化に富んだ山塊全体の雄大さを満喫することができる。

白雲岳は山裾に広大なお花畑があり展望もすばらしい。白雲岳の南に続く忠別岳(1963m)、五色岳(1868m)、化雲岳(1954m)も秘峰と言えよう。

大雪山以外に北海道では石狩川と十勝川の源流、石狩山地のウペペサンケ山(1848m)をお薦めしたい。糠平湖畔から一等三角点の糠平富士(1835m)を経て約3時間半で山頂に立つ。頂上からはニペソツ山(2013m)の迫力ある雄姿が間近に望まれる。

十勝連峰では上ホロカメツク山(1920m)を推す。日高山脈では一等三角点峰・芽室岳(1754m)をお薦めしたい。日高は山が深く、百名山で人の多い幌尻岳(2052m)を除けば、どの山も秘峰と言えそうだが、カムイエクウチカウシ山(1979m)やペテガリ岳(1736m)は二百名山だ

けに、それなりに登山者がいた。その点芽室岳は登山口までのアプローチも短く、3時間で頂上に立つことができた。

道央のニセコ連峰ではチセヌプリ(1135m)。名前のとおり家形をした台形の山容で頂上には小さな湿原があり、ニセコアンヌプリ(1308m)、目国内岳(1203m)などニセコ連峰の山々が見渡せる。

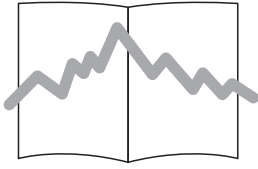
東北では南八甲田の櫛ヶ峰(1517m)がお薦め。北八甲田縦走の途中、大岳(1585m)と小岳(1478m)の間にある仙人岱避難小屋に泊まって翌朝登った高田大岳(1552m)も、ひっそりとした山で秘峰と言えそうだし、それから数年後に猿倉温泉から入って南八甲田山中に幕営3泊して、黄瀬沼や黄瀬沼などの湿原を訪れながら猿倉岳(1354m)、駒ヶ峰(1416m)、櫛ヶ峰、乗鞍岳

(1450m)などに登り、どの山も湿原も静かで貸切状態だった。

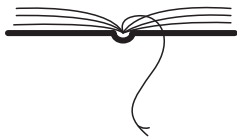
東北でもうひとつ山形県北部の神室連峰最高峰・小又山(1367m)がお薦め。前神室山(1342m)・神室山(1365m)・天狗森(1302m)・小又山・火打山(1238m)・本蔵山(1027m)と縦走したとき、草付の稜線と小又山頂上から西に鳥海山、月山、東に禿岳、虎毛山、栗駒山などの展望がすばらしい。

茨城県では八溝山の南、栃木県境稜線にある花瓶山(692m)を推す。県境の茶の里トンネル手前から、ほぼ県境稜線を北上し、小ピークのアップダウンを繰り返して3時間で図根点と山名標識のある頂上に到着。灌木に囲まれ展望はないが、貸切の山で静寂を味わうことができ、春にはカタクリやイワウチワなどの可憐な花の群落に出会える。

(7月号に続く)



図書紹介



外道クライマー

宮城公博著



2016年3月
集英社インターナショナル
四六判 277頁
1600円＋税

これは、草鞋で滑滝をたどつて
と言うような牧歌的な沢登りの本
ではない。熊野神社ご神体・那智
の滝を登って逮捕された事件をき
つと憶えているだろう。こんな過
激な沢の話の連続で、解説の角幡
唯介さんをして嫉妬させたそんな
本である。「これまで誰も考えた
ことのないような発想で沢登りが
したかった」「ありえないことを
発想し、それを鍛え上げた知識・
経験・判断・肉体・精神・魂で、ク
ールに（実行）するのがナウイクラ
イマーであり沢やなのだ」と著者
は宣言する。

第一章で事件の顛末を語り、次
章からは、沢登りの魅力を縦横に
語る。「初週行というのは、地理的
な未知・地図の空白部を行く」探検
性の高さだと、タイのジャングル
46日間の沢登りを実行。蛇を食っ
て飢餓をしのぎ抜く。さらに困難

な地形・ゴルジュにこそ探検の可
能性が残されており、そこに真髄
があるとして、今度は台湾最強の
溪谷チャールカンシーを週行してゴ
ルジャーを名乗る。そして、「死と
隣り合わせのギリギリのところ
自然の内院に入り込み、なおかつ
そこに、自分だけの何かを残した
いのだ。登山とは、狂気を孕んだ
表現活動なのだ」「何パーセント
かの確率で起こり得る死、それを
覚悟して挑んだ登攀」、それこそが
称名廊下という悪絶なゴルジュ週
行であり、称名滝冬期初登攀であ
った。これを実践したことは正当
に評価されなければならない。

文章はテンポ良く小気味良い。
ときに奇をてらつて猥雑だが、こ
れは青年の血気、過激、大胆、潔
癖、はにかみ、そして、中途半端
への憎悪によるものだろう。そん
な自分たちの本質を著者は、第三
章の「人類のバイオニアワークと
現代の冒険」で見事に考察する。

痛快ではあるが、著者たちの行
動を全面的に支持するにはためら
いがある。しかし、若い人は本質
を追求してやまない。それは「安全
登山などというのは欺瞞に過ぎな
いし、登山や冒険とは本来、危険

で自立的な行為をさす（角幡）」か
らであり、山登りは無限に自由な
行為だからである。

登場人物は、著者ほかピオレ・
ドール賞受賞者からチーム野良犬
まで多才な精鋭ぞろい。解説は著
者の行動と思想的確に分析して
申し分がない。YOUTH CLUB
Bの皆さん、必読。著者の（ヘクシ
ー登山部）も検索あれ、外道どころ
か真正まっとうである。

（絹川祥夫）

沢野ひとし

人生のことはすべて山に 学んだ 沢野ひとしの特 選日本の名山50



2015年11月
海竜社 255頁
A5判 1700円＋税

著者の沢野ひとしはイラストレ
ーターである。なので、この本に
もふんだんにイラスト、4コマ漫
画？ が使われていて、読む楽し
みと同時に絵の面白さにあふれて
いる。そのイラスト一枚一枚のな
かには、大人の心をくすぐる懐か

しさや昭和の香りがそこはかとよ
みができるような「ホロリ感」がこも
っている。が、実はその味わい深
さは絵と同時に（同じ書き手から
湧きいずるのだから当たり前では
あるが）その文章にも漂い、一文を
読み終えるときには、微少に物悲
しい心地が余韻として残るのであ
る。

副題に「特選日本の名山50」とあ
り、これもまた名山推薦本かと思
いきや、帯には谷川俊太郎の「私が
知らないところにこんな豊かな
人生がある、山に登らない私はな
んだか損したような気分です」と。
山を知らない人にも未知の世界の
楽しみを紹介している「人生本」な
のである。そして表紙（ジャケッ
ト）の絵は、山頂の登山者が「ヤ
ッホー、ヤッホー」と叫んでいる
が、向こうの山からのコダマは「ア
ホー」と……、愉快なのである。

内容は北海道の山々を集めた
「北の山」から始まり「いつもの仲
間との山」では東北地方、「私をつ
くった山」では近郊の山々、また岩
に夢中になった時期や北アルプス
をまとめたもの、そうして九州の
山まで、山域別に全国の山々と人
生とをうまく絡めつつの8章から

成っている。子ども時代の山では「磁石の付いた水筒に」などのひと言を読むだけで一気に読者もその当時に引き寄せられるだろうし、すべての頁には、それぞれの山の話にまつわる線描のイラストが添えられ、「特選50名山」が場面を想起させる絵の魅力とともに収められている。山の地図もよく見れば手描きである。始めからお仕舞いまで、すべてアナログ・イラストでまとめられ、遊び心の込められた南伸坊の装丁により、人生を重くならず語るとなっている。

巷ではこのイラストを「下手上手」と呼んでいる節もあるらしいが、実はこの線、一朝一夕に描けるものではなく、文と相まって線描による物語性のあるイラストで、まことに味わい深い一冊となっている。

(中村好至恵)



会務報告

平成28年度第2回(5月度)理事会

議事録

日時 平成28年5月18日(水)19時00分～20時40分

場所 集会室

【出席者】小林会長、吉川・大久保・

山田各副会長、佐藤常務理

事、勝山・中山・野口・大

槻・落合・山賀・直江・星・

谷内各理事、平井・重廣各

監事

【欠席者】神長常務理事

【オブザーバー】節田重節「山」編

集人

【審議事項】

1・110周年記念事業の費用総額と海外登山基金の取崩しについて

110周年記念事業の費用総額の報告とこれに充当する海外登山基金の取り崩しについて審議した。(賛成14、反対なしで承認)

2・平成27年度事業報告・決算(案)について

平成28年度通常総会議案である、平成27年度事業報告・決算(案)について別添資料により審議した。

(賛成14、反対なしで承認)

3・定款及び定款施行細則の改正について

平成28年度通常総会議案である、定款及び定款施行細則の改正について別添資料により審議した。

(賛成14、反対なしで承認)

4・支部長の就任承認について

以下2名の支部長の就任について審議した。

関西支部 金井良碩(6988)

事由Ⅱ支部長代行からの移行による就任

北九州支部 関口興洋(1364

3)事由Ⅱ伊藤久次郎支部長からの交代による就任(賛成14、反対なしで承認)

5・入会希望者の承認

27名の入会について別添資料により審議した。(賛成14名、反対なしで承認)

【報告事項】

1・後援名義使用申請3件について報告があった。(佐藤)

2・当会所蔵物品等の借用申請4件について報告があった。(佐藤)

3・山と溪谷社からの日本山岳会HP公開情報の「登山白書2016」への転載依頼について報告があった。(佐藤)

4・熊本地震及び今後の災害発生時における日本山岳会の対処方針

について(小林)

熊本地震に対する当会独自の募金活動等は見合わせることにした。しかしながら、今後も起こりうるであろう災害に対応すべく体制作り等について検討を重ねていくことを申し合わせた。

5・来訪したインド The Himalayan Club の Ms.Nandini Purandare の対応について報告があった。(小林)

6・平成28年度行事予定を支部等へ周知することの報告があった。

(佐藤)

7・老朽化した空沼小屋(旧秩父宮殿下ヒュッテ)の修復保存募金への協力依頼について報告があった。(佐藤)

8・高尾599ミュージアムでの「山の日」パネル展について報告があった。(吉川)

9・長野県登山安全条例に基づいて指定された登山道について報告があった。(佐藤)

10・4月29日(金)〜30日(土)にカトマンズで開催されたマナスル初登頂60周年記念式典及び5月8日に毎日新聞社主催で開催されたマナスルデーについて報告があった。(小林)

11・日本山岳会、群馬県山岳連盟、群馬県勤労者山岳連盟の山岳3団体および群馬県からなる「群馬県山岳団体連絡協議会」の設立について報告があった。(佐藤)

12・8月10日(水)〜11日(木)松本市・上高地にて開催される第1回「山の日」記念全国大会のスケジュールについて報告があった。(大久保)

13・ネパール大地震救援募金が終了し、被災地に届けたこと、会報「山」及び当会HPで報告を掲載したことについて報告があった。

(佐藤)

14・上高地山岳研究所の元川里美管理人を防火管理者として選任し、梓川消防署に届けたとの報告があった。(大槻)

15・平成28年度会費滞納除籍対象者76名について報告があった。(佐藤)

【連絡事項】

1・「第5回梅棹忠夫・山と探検文学賞」授賞式 6月7日(火)13時〜長野市

2・「山の日」制定記念・田淵行男写真展「北ア展望」 6月7日(火)〜10月30日(日) 田淵行男記念館

3・「エベレストを越えて」 4月22日(金)〜7月6日(水) 植村冒険館(板橋区)

【今後の予定】

1・第70回ウエストン祭 6月5日(日)10時〜 上高地

2・マナスル初登頂60周年および国民の祝日「山の日」施行記念事業 7月10日(日)10時15分開場 JICA市ヶ谷ビル

3・第32回東北・北海道集会 7月30日(土)〜31日(日) 森吉山荘

4・第1回「山の日」記念全国大会 8月10日(水)〜11日(木) 松本市・上高地

5・次期理事会等

6・月度常務理事会 6月1日(水)18時30分〜 集会室

6・月度理事会 6月8日(水)19時〜 集会室

6・平成28年度通常総会 6月25日(土)14時〜 TKP市ヶ谷ビル9階

会員異動(5月)

物故

大久保勝己(3910) 16・4・20
川上 隆(4026) 16・5・12
宮川良雄(8391) 16・4・27

霜田嘉一 (9483) 16・3・29
飛田 彰 (9725) 16・5・5

退会

島 汀子 (7140) 富山
高橋知也 (8452) 山形
庄司長生 (9287) 静岡
金藤貞夫 (9843) 関西
萬國谷慶子 (14134)
下野葉月 (14590)
中澤武夫 (15081) 福島
五十嵐孝雄 (15895)

ルーム目誌 5月

6日 財務委員会 自然保護委員
会
9日 スキークラブ 九五会
10日 常務理事会 山岳研究所運
営委員会 二火会
11日 図書委員会 資料映像委員
会 三水会 山想倶楽部
12日 フォトビデオクラブ YOUNG
UTHS CLUB
13日 資料映像委員会 山行委員
会 スケッチクラブ
16日 公益法人運営委員会 総務
委員会 資料映像委員会
財務委員会
17日 資料映像委員会 「山の日」

事業委員会 学生部 緑
爽会 スキークラブ

18日 理事会 青年部 つくも会
19日 科学委員会 フォトクラブ

20日 休山会 みちのり山の会
山の自然学研究会 スケッ
チクラブ 山岳地理クラブ

23日 スキークラブ
24日 デジタルメディア委員会
遭難対策委員会 YOUNG
UTHS CLUB

25日 自然保護委員会 00会 麗
山会

26日 学生部 山遊会
27日 支部事業委員会 YOUNG
UTHS CLUB

30日 総務委員会 YOUNG
UTHS CLUB 二火会
31日 公益法人運営委員会
5月来室者 469名



I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

◆ 剣岳・早月尾根を登る

山行委員会

一直線につながる早月尾根、標
高差2200mの健脚コースを、
朝の涼しい時間から登ります。早
月小屋に2泊し、余裕を持って静
かな剣岳を楽しむ企画としました。
日程 9月3日(土)〜6日(火)

集合 3日(土)上市駅改札15時45分

行程 上市駅⇨馬場島荘(泊)⇨早
月小屋(泊)⇨剣岳⇨早月小
屋(泊)⇨馬場島⇨上市駅歩程 4日⇨6時間半 5日⇨6
時間 6日⇨4時間(健脚向
き)費用 3万5000円(タクシー・
宿代・保険料等)定員 15名
申込み 8月15日(月)まで 数見直
宛 090-017204-4668 sanko@jac.or.jp
*傷害保険加入のため、生年月日
をお知らせ下さい。

◆ 北アルプス 餓鬼岳⇨黒部五郎岳

縦走

山行委員会

北アルプス全山縦走シリーズの
第5回。北アルプスの隠れた名
山・餓鬼岳から黒部五郎岳まで縦
走します。岩稜を通り、お花畑の
カールに遊ぶ素晴らしいコースで
す。
日程 9月8日(木)〜13日(火) (プ
ラ
ス予備日1日)

集合 8日17時大町のホテル(泊)
行程 白沢登山口⇨餓鬼岳(泊)⇨
燕岳⇨大天荘(泊)⇨槍ヶ岳
山荘(泊)⇨黒部五郎小舎
(泊)⇨北ノ俣岳⇨飛越トン
ネル登山口⇨新穂高温泉(解
散) *希望者は後泊可解散 13日16時ごろ
参加費 5万5000円(5泊分)
募集人数 12名
申込み 8月15日までに清登緑郎
宛 090-019325-8

258 sanko@jac.or.jp

会報「山」の目録について

会報「山」は付録として50号ごとに目録をつけていますが、現在、801号から850号までのものを作成中で、6月中には完成します。今回から、印刷経費と送料を削減するため、記事データのみを作成し、印刷は会員各自で行なっていただきます。従来どおり紙での印刷を希望される会員には、事務局にハガキか①(03-3261-4441)、②(jimukyoku@jac.or.jp)などいずれかの方法で、6月末までに申し込んでください。あらたに見積りを取り、印刷・発送の実費は徴収させていただきます。

また会報と併せて製本をお引き受けします。会報801～850号までの製本をご希望の方は、8月末までに現本を事務局までお送りください。

1・製本業者は前回(2012年4月)と同じです。

①全面同色(ブルーグレー)ハードカバー

②背表紙にタイトルと会員番号を印字

③索引は巻頭綴り

2・次号分は各号150円で補充可能ですが、在庫がない場合はコピーで代用となります。

3・製本費用は梱包と返送費用を含めて4000円です。ルーム受取りの場合には500円引きです。その旨をお書き添え下さい。製本代金は、書籍発送時(9月末頃)に振込用紙を同送します。

4・過去の会報についてもお引き受けします。

ご不明な点は事務局までお問合せ下さい。

(会報編集委員会、図書室・田村)

参加者には詳細案内いたします。

◆南アルプス塩見岳・農鳥岳縦走

山行委員会

南アルプスのほぼ中央に位置する塩見岳から日本の山岳標高ベスト100の100番目、新蛇抜山がある仙塩尾根を通って熊ノ平に至り、三国平より農鳥小屋へのトラバース・ルートを通って農鳥岳まで縦走します。

日程 9月15日(木)～19日(月)

集合 15日15時15分大河原バス停

行程 鳥倉登山口―塩見小屋(泊)

―塩見岳―熊ノ平小屋(泊)

―農鳥岳―大門沢小屋(泊)

―奈良田(解散)

解散 19日10時ごろ

参加費 3万9000円(4泊分)

募集人数 12名

申込み 8月15日までに清登緑郎宛

宛 090-9325-182

58 ②sanho@jac.or.jp

参加者には詳細案内いたします。

◆松本市美術館特別展

「山の日制定記念 遙かなる山―

発見された風景美―

明治期に日本で近代登山が黎明を迎えると、自然美に憑かれた画家たちがその感動を画面に描きとめます。大正から昭和初頭に観光

ブームが起ると、山がより身近になり、山の絵にも新しい表現が生まれました。本展では、明治から昭和前期にかけ、雄大な山容、天空の里を描いた画家46人(大下藤次郎、丸山晚霞、吉田博、中村清太郎、茨木猪之吉、石井鶴三、足立源一郎)の120点を紹介します。いつの時代も人々を惹き付けてやまない山の魅力の原点を、絵画の世界から振り返ります。

本展には、公益社団法人日本山岳会の協力による4作品のほか、同会に所属した画家の作品が多数出品されます。この機会にぜひご覧ください。

会場 松本市美術館 企画展示室

会期 7月16日(土)～9月4日(日)

(7月19日・25日休館、8月

8日は展示替えのため休室)

開館 9時～17時(8月11日は19

時まで延長)

料金 大人1000円 大学高校

生600円 中学生以下無料

問合せ 〒390-0081 長野

県松本市中央4-2-22 松

本市美術館

TEL 0263-39-7400

<http://matsumoto-artmuse.jp/>

日本山岳会会報 山 853号

2016年(平成28年)6月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社

◆編集後記◆
●長野県登山安全条例に基づく「登山を安全に楽しむためのガイドライン」検討会の座長を命じられ、やっとまとめたが、改めて登山という遊びの幅広さ、奥深さを認識させられました。少しでも遭難事故をなくすために、山でのルールやマナーを抽出し、整理したもの近々発表しますが、その後に刊行される解説版ともどもお役立ていただければ幸いです。
●今月は岩木山と白神山地を歩きました。前日の東京が真夏日だったので油断していたところ、岩木山頂では気温5度に強風が加わり、さすが津軽の「御山」は甘くない、と思ひ知らされました。瑞々しい緑とふかふかのブナ林の落ち葉道を歩いた白神山地とは好対照の、津軽の山旅でした。(節田重節)